
IS インフィニット・ストラトス--魔神に仕えた彼の生き様は--

レンレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス——魔神に仕えた彼の生き様は——

【Nコード】

N4274R

【作者名】

レンレン

【あらすじ】

ゼロ・レクイエムを無事に見届けた霧咲藍。

彼は親友であり、主君であり、仲間でもあったルルーシュの願った世界を見て回っている最中に別の世界へと渡ってしまった。

そこは女尊男卑の世の中であり、ナイトメアフレームKMFではなくISが世にある世界だった。

元の世界へと帰る当てのない彼は、帰る手段を模索しつつ新たな人生を歩み始める。

STAGE 00 始まりの日（前書き）

はっはー、始めちゃったぜーw

まあ、超不定期更新になるのは目に見えてますが頑張りますwwww

STAGE 00 始まりの日

世界で唯一ISを動かせる男『織斑一夏』が世を騒がせ、実の姉に頭を叩かれながらも無事に自己紹介を終えた次の日：

「さて、と…ここがIS学園だな……………はあ、東さんも急に行けっ
て言うんだもんなあ」

黒のスーツに身を包んだ『男』が一人呟いた。

そう、『男』なのだ…この学園にはあまり存在しない筈の男——霧咲藍——は彼の有名なIS学園に来ていた。

「えっと…職員室は何処かなって」

「止まれ、その貴様。」

学園内を徘徊するも夕方生徒の大半が下校しているせい、中々人に会うことはなかったが、ようやく後方から声をかけられた。

「おやおや、私は怪しい者ではございませんか？」「この学園に男がいる時点で十分に怪しい、何の用があつて来た。」

こちらと同じくスーツを纏っていて、異様な威圧感を放つ以外は麗人という言葉が相応しい。

しかし彼女が藍に対して訝しむのも至極当然でもあった、ここのセキュリティが国家レベルなのは周知の事実だ。

それを警報の一つも鳴らさずに入ってきたのだから。

「……？篠ノ乃博士から招待状というか推薦状というか……とにかく連絡を受けていませんか？」

「……何の話だ、何故そこでヤツの名前が出てくる？」

実はこの二人、この遣り取りで既に事態を何となく察していて、同じことを考えていた。

『あの天才^{バカ}……やりやがったな』と

「えっと、とりあえず自己紹介をしましょうか……僕の名前は玖珠木藍、篠ノ乃博士から言われてやってきました。」

「ああ、私は織斑千冬だ……とりあえずついて来い。」

こうして彼は無事(?)に学園へと入ることが出来た。

因みに、藍が「ああ、あなたが彼のちーちゃんですか」と言って出席簿で殴られたのは全くの余談である。

設定（3／30更新）※主人公の名字を変更しました。

霧咲 藍 （きりさき あい）

（本名…???）

年齢…22才（前） 15～18才（今）

身長…180？

体重…70？

出身…神聖ブリタニア帝国

容姿

髪色…銀髪

髪型…前髪は少し右目にかかる程度のアシンメトリー
後ろ髪の長さはカレンと同じくらいで、ギリギリ肩にかかるくらい
を短く結んでいる。

幼少の頃にランペルージ兄妹と共に日本へと渡った。

その後スザクと仲良くなるも、ブリタニアとの戦争が激しくなりランペルージ兄妹を守りながら放浪。

その後は、アッシュフォードで匿われ静かに暮らす。

しかし、ある日ルルーシュと共にテロに巻き込まれC.C.と名乗る少女に出会い、二人ともギアスを授かる。

藍のギアスは何故か発現しなかったものの、ルルーシュが手に入れた『絶対遵守のギアス』を主軸に世界へと反逆を始める。

後は原作通りに事が進む。

ルルーシュと共に黒の騎士団を結成。

← 結成にあたって、以前から考えていた日本人としての名前を決定

← 騎士団の活躍を見たキョウトからの支援で紅蓮式式の兄弟機をもらう。

← 幾度かランスロットと戦いつつも勝負はつかず。

← そのまま特区日本もルルーシュのギアスの暴走からユフィが殺戮を始め、ルルーシュと共に収める。

← ブラックリベリオン時に正体がスザクにばれる。

← ゼロの逃亡による騎士団の敗北。

← カレンやC.C.と逃亡生活。

← R2に突入。

← 原作通りにゼロ・レクイエム終了。

← 一年に一度、C.C.と会う約束をしてから旅に出る。

← 旅の最中、ギアスの紋様が刻まれた遺跡を発見。

← 藍のギアスが勝手に発動。

← I S 世界へ。

← 篠ノ乃束の元へと転移

← 気づけば身体は若くなっていた。

← 何故かKMFもI S 化

← 束が興味を持つ。

← 自分やKMFの事を教える代わりに、世界の事やI S の技術等を教えてもらう。

← I S 学園へ。

本名や日本に来る前等は話が進むにつれて、随時更新します。

機体設定（前書き）

機体設定ですが、基本はギアス世界からのパクリです W

この辺りの説明キボンヌとか言われても、恐らく説明できません W W

ご容赦ください W W W

機体設定

ギアス終了時点

黒耀輝翼三源式

(こくようきよくさんげんしき)

イメージカラー…黒

分類 第九世代KMF

所属 ブリタニア

推進機関 ランドスピナー

エナジーウイング

装備

誘電砲左腕

黒耀の固有装備

溜めたエネルギーを放出することで、電磁結界（簡易版ゲフィオンデイスターバー）を一時的に作りだす。

エネルギーの電導率と密度を変えれば、放出したエネルギーで直接攻撃も可能だが多くのエネルギーを消費するため燃費が悪い。

レーザーバイブレーションソード
ランスロットと同じ物を装備

エナジーウィング
これもランスロットアルビオンと同じ型の物

IS化後

名称…オブシディアン（obsidian）

イメージカラー…黒

装備

誘電砲兼輻射波動機構左腕

誘電砲を電磁結界の効果のみ残し攻撃性を捨てた代わりに、輻射波動機構を取り入れた腕。

その輻射波動機構も聖天八極式の輻射推進型自在可動有線式右腕部

の一部を参考に取り入れられている。

普段は量子化されている。

メーザーバイブレーションソード

(M V S .. M a s e r V i b r a t i o n S w o r d)

高周波振動で鉄をも両断する斬撃兵装。もちろんIS用に小型化されている。

使用時には2つに割れていた刀身が合わさり、赤く発光する。

ヴァリス

(V A R I S .. V a r i a b l e A m m u n i t i o n R e p u l s i o n I m p a c t S p i t f i r e)

可変弾薬反発衝撃砲。

弾薬の反発力を制御できるライフル。

ノーマルモードとバーストモードの切り替えが可能。

ブレイズルミナス

本来はサクラダイトにより発生するエネルギー場で物理攻撃を防ぐシールド。

しかしIS世界にはサクラダイトがないため、東博士が作った別のエネルギー場を使っていて、正確には別物だが便宜上ブレイズルミナスと呼称。

ただし展開時間は両腕それぞれ五分ずつと短い。

エナジーウイング

前の世界でセシルにより考案されたフロートユニットを基礎にしている。

翼基部から巨大なエネルギー翼が展開される。超高速飛行能力によるスピードに加えて、ウイング部から無数の刃状粒子を広範囲に放つ砲撃が可能だが本来のエナジーウイングと違い、ブレイズルミナスの関係上ウイングでの防御は不可能。

KMF黒耀の歴史

黒耀壱式（キョウトより支援）

←

黒耀可翔式（紅蓮可翔式に合わせ進化）

←

黒耀輝翼三源式（ゼロ・レクイエム前にロイド達に改良させた）

←

obsidian（現在）

因みにobsidianは英語で黒耀石という意味…だったかと（笑）

IS化してくれた黒耀（相棒）に藍が新たに名をつけた。

STAGE 01 初登校

結果のみを言うと、霧咲藍はIS学園へと通うことになった。

その後、藍はどうか篠ノ乃東と連絡をとった。

ただ一つ問題があったとすれば、それは篠ノ乃東が織斑千冬に全てを押し付けたことだ。

正直、そこから制服の手配や入学手続き等の必要事項を一挙に終わらせてくれた千冬には感謝してもしきれないだろう。

そしてそういったことを全て終わらせた頃には日が暮れていたため、藍は近くのホテルに泊まることになった。

そして次の日、藍は千冬に指定された時間ちょうどに学園に来た。

――side 藍――

「で、僕が入るクラスはどこなんですか？」「学園側の配慮でお前が入るクラスは1年1組になった、そこには織斑一夏がいるからな」
織斑一夏…？ああ、あの世界で唯一ISを使えるとかいう男か。

「というか、高校1年生か…」

「む、束から送られてきたデータではそうになっているが間違ってい

るのか？」

いや、間違っちゃいないというか何というか…

「ああ、いや何でもないです…」

「…そうか？」

ああ、よもやルルーシュやスザクよりも年下になろうとは…

なんて感慨に耽っている暇はなく、とりあえず入学に関する書類等にサインをした。

ん、戸籍はどうしたって？

はっはー、束さんは凄いな。

これ以上の言葉が必要とは思えない。

そして無事にサインも書き終わり、遂に教室までやってきた。

しかし教室の扉に手をかけ、織斑先生はピタリと動きを止めた。

「ああ、先に言っておいてやるが…気をつけろよ」

「はい？」

え、え？

何、どゆこと？？

それ以上は先生も何も答えてはくれなかったので、よく分からないまま俺は教室に入った。

「あ、織斑先生…そちらの彼が？」

「ああその通りだ、静まれバカ共！！……では山田先生、頼みます。」

山田先生と呼ばれた彼女は副担任なのだろう。

…いろいろと特徴的だな

いや、特にどの辺りかは言わないが……なあ？

「では皆さん、一日遅れでやってきた新しいお友達を紹介しますね、霧咲藍さんです！」

「霧咲藍です…イロイロと迷惑をかけるかと思いますが、よろしくお願いします。」

ざわ…ざわ…

ん、今からギャンブルでも始まるのか？

「日本人…じゃない、よね？」

「うん、銀髪だし」

「でもまあ、なんにせよ…」

「「「「カッコイイー!!」」」」

「おお、ハウンドボイス?!」

「耳がキンキンする…」

「日本に生まれてよかったー!」

「すごく…好きです!!」

「また男子が増えた!!」

「織斑君の倍率下がった!!」

「キタ——（。▽。）——ッ!」

「お母さんに親孝行しよ…」

皆は口々に思ったことを言っていく

最後の子はきっかけが俺じゃなければ…と思わずにはいられない

っていうか

どんだけ男に飢えてるんだ……

「では霧咲君は空いてる席に移動してください」
「空いてる席って：アソコかい」

皆が（恐らくは）名簿順に並んでいる中で空いている席：つまり窓
際で最後尾：やだなあ

女子が来ても避けられないじゃないか……………さっきの織斑
先生の忠告はこれだったのか？！

とりあえず席には座ったが：：
くっ、どうすればいいんだ：

（まで、諦めるにはまだ早い：俺の中にはこの危機的状況を打破す
る策が８７パターン存在する）

ハッ、これは天の^{にいるルーシュ}声！
どうすればいいんだ！！

（ああ、まずはチャイムが鳴った瞬間に立ち上がれ：移動さえして
しまえば……）

キンコンカーンコン

おいルーシュ…もう女子が机の横にいるんだが、どうすればいい
んだ？

おい、返事をしろ！！
クソッ、逃げたか……

結局、俺は女子からの質問責めに律儀に全て答えていった。

ぐへえ、何で女子はこんなに元気なんだ……

とか思っていたら、今度は男子がやってきた……ああコイツが例の……

「織斑一夏だ、数少ない男なんだから仲良くしような」

「ああ……よろしく」

こうして俺は、この世界でのキーパーソンとのファーストコンタクトを果たすことになった。

しかし、まあ……

とりあえず……疲れた。

STAGE 02 代表候補生（前書き）

いやぁ短いですよ？

一ヶ月かけてこの程度かよ、ってツツコミはなしの方向でお願いします。

STAGE 2 代表候補生

翌朝……

「うへー…」

「よっ、朝から疲れてんな…」

机に突っ伏している藍にむかって、一夏が言う。

数少ない…というより、学園内では唯一の男友達だ、こうやって話をしようと試みたようだ。

「あー、よう織斑……」

「一夏でいいって、それで何かあったのか？」

「実はさ…部屋の都合やらがつくまで近くのホテルに泊まってたんだけど、どこから嗅ぎ付けてきたのか雑誌記者が来てさ……校門の前まで付きつきりだったんだよ」

「うっわ、そりゃ大変だよな…」

実際、一夏も似たような経験はあった。

世界で初めてISを使えるとの事でテレビにまで映されたのは記憶に新しいと見える。

「今日は一社だけだったけど、これから多くなると思うと憂鬱で…」
「はは…まあそうだよな」

すると、どうにか慰めの言葉をかけようとする一夏の前に、一人の女子がやってきた。

「あら、こんな所で男同士仲良く雑談でもしてらっしゃるのかしら？」

「……………アンタ誰さ？」

この反応は間違いではない
実際、藍はこの女子を見るのは初めてだ。

「まあ、わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」
「なんかすつげえデジャヴュ…」

同じ台詞を二度も聞くハメになるとは思っていなかった一夏の顔は見るからに『ウザそう』だ

「…わたくしは今、あなたとお喋りするつもりはありませんわよ？」
「……一夏、こいつ誰？」

「セシリア・オルコット…さっきも言ってたが、イギリスの代表候補生なんだってよ」

藍もこういった手合いは苦手らしく、話の相手を一夏に移す。

「ちょっと、聞いていますの!？」

「ふーん…っていうか、何故にお前はその代表候補生様にそんな嫌われてんだ？」

「なんでも俺のことが気に入らないらしいぜ、この前もケンカふっかけられて受けたばっかだ」

「いい加減に…」

「へー、もしかしてISで戦うのか？」

「ああ、ついでに勝敗でクラス代表を決めるらしい」

キンコンカーンコン

「あ、チャイム鳴った…お前も席に戻れよな」

「うげ、また千冬姉に叩かれるのは勘弁だ…じゃあな」

「キーツ、あ 後でまた来ますわ!!」

また来るのか…?

そんな藍の疑問とは関係なく、千冬が教室に入ってきた。

そして今日も授業が始まった。

STAGE 03 決闘（10／23加筆修正済）

一夏とセシリアが戦う日…

セシリアは準備を終えているが、一夏のISが到着していなかった。

「遅い…遅すぎる。」

と千冬が目に見えてイライラしているのが分かる。

「んー、なんかやな予感…ん？」

そして同時刻、我等が主人公『霧咲藍』が呟いた瞬間に一通のメールが届いた。

From: 篠ノ之東

No Title

本文

やつほー、東さんだよ（はあと）

元気かなー？ 元気だよね？

いーくんの白式の到着は遅らせといたから、存分にオブシディアンを使ってくれたまえ。

藍ちゃんってば、入学してからオブシディアンのデータくれないんだもん。

ってな訳で、よろしくねー

（・ω・）

思わず殺してやりたいと思った。by 霧咲藍

とちよつとした殺意を覚えた藍がメールを無視してやろう、と思った瞬間にセシリアがこう言った。

「あらあら、機体が届かないことを言い訳に逃げるのかしら？ やはり極東の島国の人間には、わたくしの相手は荷が重かったということですね。」

と。

この台詞に一夏だけでなく、藍もカチンときた。

自分は日本が好きだし、第二の故郷とすら思っている。

それを馬鹿にされるのというのは気分が悪い、と藍は考えた次の瞬間に自らの機体を展開させて空中へと踊り出していた。

「そんなに暇なら俺と踊ってやれないか、レディ？」

「あ あなた、専用機持ちでしたの？まあいいでしょう、余興には丁度いいというものですわ」

藍が機体を持っていることには驚きはしたものの、未だに態度は崩そうとはしないセシリア。

「という訳で、いいですよね先生？」

「ま、いいだろう：よかったな織斑、霧咲がお前をクラス代表にしてくれるかもしれんぞ？」

ちなみに通信をきった後、一夏は文句を言ったため叩かれたとか。

「さて余興とするなら：ふむ、俺はコイツだけで戦うか。」

「なっ：わたくしを嘗めてらっしゃるのかしら？」

藍が取り出したのは腰に下げてあった一振りのMVS、コレだけで戦うというのだ。「いいからお得意な中距離まで離れなよ、そっから始めてやるから。」

「このセシリア・オルコット、ここまでコケにされたのは初めてですわ：いいでしょう、後悔なさい！！」

こうして藍は戦うことになり、千冬が開始の合図をだした。



開始直後、セシリアが構えたのはスターライトmk？

彼女の主力武装の一つだ。

まずは胴体部分…つまり真ん中へと狙いを定め、撃ち放った。

これを藍は紙一重に避ける。

これにはセシリアも驚きはしない、初見で避けられたのは初めてではないし本国にもその程度の搭乗者ならいた。

次からが本番なのだ。今のはほんの触り程度、踊り狂わせるにしても伴奏にすらなりはしない。

ここからが本番、本領発揮というものだ。

「お行きなさい、ブルー・ティアーズ！！」

「ん、噂のBT兵器か。」

セシリアの呼び声に応え、四機のビットが自身を取り囲む。

「そう、これこそがこの機体が『ブルー・ティアーズ』たる所以…この特殊兵装を積んでいるからこそという訳ですわ」

「ほほう、解説ありがとう。ただまあややこしいことには変わりないな。」

「ふふふ、減らず口を叩けるのも今の内ですわ！さあ踊りなさい、このブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で！！」
ワルツ

そう言ってスターライトは右足を狙った後、ビットでは背面を狙った。

「…惜しい。」

しかしこれも紙一重に避けられる。

その次は左肩と左足を。

「またですの…」

幾度も違う角度から、違う箇所へ撃ちこむも同じように避けられる。そうして漸く気づいた。

藍が全ての攻撃をギリギリで避けていることに。

大きくは動かず、それでいて機体の周りにあるシールドに触れないように。

つまりそれは完全に見切られているということ。

にわかには信じられないかったが、その仮説は確信に変わり、彼女の顔を怒りに染める。

そう、センサー越しに見えた藍の表情によって。

藍は口角を上げて余裕を見せつけるかのように、こちらを向いたのだ。

『コケにされた』

そうセシリアは思った。

そんな表情は消してやる。

そして焦りと苦悶の表情で染め上げてやる、と。

しかし。

ビットによる同時多角攻撃や時間差攻撃、その直後のレーザーライフルすらも回避される。

その上、藍の動きにつられて自分自身も動いてしまう…いや動かされている。

無様にも、セシリアは自身が踊らされている感覚に陥ってしまう。

「くっ、先程からちょこまかと…」

「よし…そろそろ動くか」

そう呟いたの藍は、その場から真っ直ぐにセシリアの元に翔ける。

「なっ、早…っ!?! しかしその様な直進での接近を許すとても!」

今までとは違うスピードに驚いたセシリアはビットをむかわせるも、藍はそれを振り切っていく。

セシリアが気付いた時には、剣が突き付けられていた。

「俺の勝ち…でいいな？」

「は はい…」

本来ならば、まだ続けられるだろう…

しかし、今までのやりとりでセシリアは悟ってしまったのだ。

圧倒的なまでの実力差に

『勝者、霧咲藍』

織斑教諭の宣言に会場が沸く。

「ふう」

「……………」

『たった今織斑の機体が届いたため、続けて試合を行う、オルコツトは調整に入れ。』

へえ、流石は束さん。

完璧なタイミングだったな。



あれから調整に入った一夏とセシリア。

よく考えてみると武装を一つも壊されていないセシリアは意外と早くに調整が終わり、一夏を待つ羽目になったため、藍と話していた。

「あ あのと、どうして私の攻撃をあそこまで回避することができたの？」

「んー：誰にも邪魔されない1対1の試合なら、周りを気にせず相手の動きをじっくり見えるからかな。」

何気なく話している藍も実は意外に状況が読めてなかったりする。

「……おい」

「ひゃっ！！な なんですか?!」

かなり間拔けな叫びに藍も少しばかり驚く。

「ひゃって何だ、ひゃって……まあいい、そういえば試合で気になった点を言ってやるとだな。まず照準を合わせる前に目標箇所を目標線で確認しすぎ、それじゃあ強力な砲撃もテレフォンパンチと変わらない：だから簡単に予測されてしまう。次にビットに三次元的な動きが足りない上に位置取りが甘いせいで近接武器でも届いてしまう。それを改善してから可能な限り相手の動きを予測できるようになれば完璧だな。」

「私の癖まで見抜いてらっしゃったの!？」

「いや、まあ見抜いたっていうか『それでは次の試合を行う。オルコットと織斑は位置につけ。』あー、まあ話は今度ということの一つ。」

「それは構いませんが…あ　あの、もしよろしければ、後日訓練に付き合ってくださいませんか？今回の敗北を次に活かそうと…」

千冬のアナウンスを聞いてISを展開したセシリアが藍に言う。
ちなみに顔を真っ赤にさせながら。

「ああ構わないよ。だが今は早く行った方がいい、織斑教諭に怒られてしまう。」

「ふふっ、そうですわね。では行って参りますわ。」

STAGE 04 クラス代表（10／27加筆修正済）

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

あの決闘があった日の翌日、朝のSHRにて織斑一夏はそう宣告された。

その宣告に周りの女子達は騒いでいる。

「先生、質問です。」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合には負けたんですが、なんでクラス代表になるんでしょうか？」

そう、彼は負けていた。

勿論、他でもないセシリアにだ。

そこには理由がある：簡単な話だ、一度負けて冷静さを取り戻したセシリアは常に距離を保ち、自らのスタイルで戦った。

藍から聞いた自分自身の欠点を極力なくす形で。

しかし一夏も負けてはいなかった、一次移行を終えてからは動きも変わった。そこからはセシリアからの攻撃の殆どを避け、時には雪片式型を使いビットを…そして攻撃をも切り裂いた。

ファーストシフト

攻撃を切り裂いた時は周りだけでなく、セシリアも驚いた。

零落白夜

それが一夏が持つ白式の単一仕様能力。

最大の特徴の一つは雪片式型から形成されたエネルギーの刃は相手のエネルギー兵器の攻撃を無効化するというもの。

動揺したセシリアに接近することが出来た一夏は雪片式型を振りかざすもセシリアのビットの一つを切り裂くにとどまった。

しかし勢いのついた一夏は再び接近を試みる。

しかしそれを易々と許すセシリアでもなく、自らの武器のスターライトを放つ。

しかし零落白夜の前に、それは阻まれた。

そして今度こそ当てるために雪片式型を振り上げ……

唐突に試合終了が知らされる。

勝者はセシリア。敗者は一夏という形で。

ポカンとする一夏、普段はあまり出さない近接武器で迎撃の構えを取ったセシリアや熱狂していた観客ですらも一様に同じような表情をした。

敗因は白式のシールドエネルギーが切れたこと。
しかし、一夏は直前に攻撃をくらった訳ではない。

では何故か、それこそが零落白夜のもう一つの特徴である
エネルギー兵器の攻撃を無効化し、時にはシールドバリアを切り
裂くことでシールドエネルギーに直接ダメージを与えするという最大
級の攻撃力を誇るこの能力にも欠点がある。
いや、正当な代価とも言えるだろう

それは自身のシールドエネルギーをも力に変える、というものだ。
つまり、そうバカスカと使えるものではないということだ。

それでなくとも序盤にそれなりのダメージを受けていた一夏、エネ
ルギーが尽きてしまったことにも頷ける。

とまあ話は戻るが、つまるところ一夏は負けた。

勿論善戦であったのは間違いない。

しかし武装の一部を破壊されたもののエネルギー残量だけを見れば
セシリアの圧勝だった。

だからこそ一夏も不思議に思っただのだ。

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたり、と音をたてて立ち上がるセシリア。

一夏は「なんで辞退なんてしてくれやがったんだ」という顔をしている。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせ、このわたくしが相手だったのですから仕方がありませんわ。」

「そ　それなら、勝った藍に役が回ってきたっていいじゃないか」とまあ一夏にしてみれば、どうにか逃げ道を作りたい訳なので矛先を変えてみるが……

「ほう、つまり貴様は推薦されなかった人間に押し付けるというのか？」

「うぐっ……」

千冬がそれを許す筈もなく……

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの。」

因みに、セシリアが一夏を名前で呼ぶのにも理由がある。

どうやら、実戦を通じて一夏をそれなりには見直したらしく、一夏のことを気に入ったらしい。

「まあ、もし戦闘が不安だと言うのなら、わたくしが直々に教えて差し上げてでもよろしくてよ。」

「生憎だが、一夏の教官なら事足りている。私が直接頼まれたからな」

そう言って篠ノ之箒は立ち上がる、心境を語るなら「せっかくの一夏の時間を奪われてたまるか!!」といったところだろう。

「あら、それは失礼しました…ISランクCの篠ノ之さん」

「なっ……ランクは関係ないだろうっ」

しかしセシリアは怯みはしない、強気な態度で迎え撃った。

遠い異国で見つけたお気に入りなのだ、他人に渡したくはないのかも知れない。

(…そういやあ、俺のIS——KMF——に適性ってあんのかな?)

視界の端で箒とセシリアが言い争う中、ふと藍は考えてみる…因みに計ったことはない。

そういえば、と今度は束に聞いたことを思い出す。

「あー、いつだったかに決められたアレのことかなあ? なら気にしなくていいよー、なんてったって藍ちゃんの操縦技術は最高峰! ランクなんて関係ないもんねー、ぶい」

ポーズ付きで言われたものだ。

バシンバシン!!

(あ、話聞いてなかった。なんで一夏はしばかれてんだ?)

「クラス代表は織斑一夏だ。異論はないな」

はーいと一夏を除いた声でSHRが終了した。



「では、これよりISの基本的な飛行訓練を実践してもらう。織斑、オルコット、霧咲の三名は前に出る。」

当然のように言われた通りにする三人。

「ではISを展開しろ。」

因みに、ISというのは最適化処理を済ませればアクセサリーとな
って待機状態になる。フッティング

例えばセシリアならイヤークラスで、藍ならKMF時代の起動キ
ーが紐で首にかかっている状態だ。

どうやら非常に珍しい例として、一夏の白式の待機状態はガントレ
ットらしい。

「早くしろ。」

織斑先生に急かされて、一夏が急に突き出したガントレットを逆の
手で掴む。

これはISを展開する際に展開のイメージを強固なものにするため
のポーズだ。

勿論、イメージは個人によって違うためにポーズも人それぞれにな
る。

「霧咲も展開しろ。」

「（ふむ、俺は共に戦場を駆け抜けた愛機をイメージするだけいいが…初めの頃にとつてたポーズを久々にするか。）」

まず首元にある起動キーを取る動きをしてから、差し込む動作をする。

ふむ…やっぱり、と藍は考える。

すると千冬の方から声がかかった。

「展開自体は早いがモーションが多いな。」
と

まったくもってその通りだ、一夏がガントレットを掴むという1モーションに対して、藍にはモーションが二段階ほどある。
これじゃあ展開が早くとも意味がない。

「ですねー、久々にやったけど効率はよくないですし、次から普通にやります」

「それが出来るなら余計なことはせずに最初からそうしろ……まあいい、では全員飛べ」

「はいはい」

急上昇した三人は同じ向きに飛び始める。

藍はセシリアの隣を飛び、一夏は後ろから追いかける形だ。

「織斑、スペック上お前の白式はオルコットの機体より上だ。簡単に出遅れるな」「うぐ…っていうか空を飛ぶ、っていう感覚自体が

あやふやなのに急にやれって言う方が無茶だろ」

千冬の叱咤に一夏はそうぼやく。

「あら、イメージは所詮イメージなのですから、自分のやりやすい方法を模索した方が建設的ですよ。」

「まあ、そういうことになるな。」

「でもなあ……そもそもどうやって浮いてんだコレ？それが分からないのにどうやってイメージしろってんだよ。」

「説明してもよろしいですけど、長くなりますわよ？まず反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの。」

「よし分かった。説明しなくていい。」

どうやら基礎科目すら分からない一夏には荷が重かったらしく、一も二もなく返事を返す。

「あら残念。」

「いや、俺は興味あるがね。だがまあバカは考えるより実践した方が早い。」

「バツ！？誰がだ！！」

「いやいや、確かお前IS教本を電話帳と間違えて捨てたんだろ？十分バカでしょうよ。」

「うっ…」

「ふふふっ」

「そうだ馬鹿者、さっさと二人に追いつけ。」

「はぁ…」

唯一の男友達にはバカと言われ、セシリアに笑われる、挙げ句の果てには実の姉からも馬鹿者と言われ、未だに二人に追いつけていなかった一夏は溜め息を漏らす。

「では、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ。」

「了解です。ではお二人共、お先に」

そう言って降下していったセシリア。

すぐさま地上付近に到達して、目標である十センチをクリアしたらしい。

「へえ、やっぱり上手いもんだなあ」

「次は俺が行くか…」

「えっ、俺が最後かよ!!」

「いいじゃないか、最後……オチ要員か（ボソツ）」

「おい、たった今聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ?!」

「気のせいだ。じゃあな、先に行く」

後ろで喚く一夏を無視して地表を目指す藍。

目標の十センチを上手くこなした……若干スクリー回転とかの無駄な動きが入っていた気はするが。

「よし、到着つと……あたっ!？」

「余計な真似をするな、誰が難易度を上げてトライしろと言った。いるとは思えんが、どこかの馬鹿が真似したらどうする。」

恒例、織斑千冬の出席簿アタック。

最近では生徒の間で『あれでISにも勝てるんじゃない?』とまことしやかにウワサのあれがシールドバリアーをも突き破り、藍の脳天を正確に揺らす。

「いやいや、難易度高いのが見た目で分かってるのに真似する馬鹿がいるとは思え……」どいてくれええええ!?!?」ない、ってうおつと?!!」

今度は頭上から聞こえる一夏の声。

見ると減速なしに地面へ向かってくる。

ご丁寧なスクリー回転……の真似事と思しき動きをしながら。

ズドオオオオオオオン

多くの女生徒の悲鳴やざわめきを包み込む土煙。

晴れた先に見えたのは……

「……先生、すみません。馬鹿はココにいましたね。」

「ああ、あれが身内かと思うと頭が……いや今のは聞かなかったことにしてくれ。」

先程の墜落で一夏が作ったであろうクレーターと、ギリギリ範囲外でお姫様抱っこしている藍と千冬の姿だった。

「「「……………」」」

「「「キャアアアアアッ!!」」」

「霧咲くんと千冬様のツーショット!!」

「しかも、千冬様がお姫様抱っこされてるなんて!!」

「カメラ…………カメラはどこなのッ?」

「教師と生徒の禁断の…………いい。」

「ハアハアハアハアハア」

そして女子軍団が見逃す筈がない。

お姫様抱っこされている千冬が自分の腕を藍の首へ回されていることなど、特に。

「なっ?!／／／／／」

「おうふ、またハウンドボイス…………」

藍は全く意識していないが、周りにはそう見える。

「ゲホッ、ゲホッ、おい藍、ちょっとは助けてくれたって…………って何千冬姉とくっ付いてんだよ!!」

「そ、そうですわ藍さん!! いつまでくっ付いてらっしゃるつもりですよ!!」

「全面的に一夏のせいだと思うが、それもそうか…っと、じゃあ下ろしますよ、織斑センセ。」

顔は真っ赤なままだが、何も言わずに立った千冬はそのまま一夏の元へツカツカと歩いて行く。

「そ　そもそもお前があんな馬鹿なことさえしなければ、私が恥をかくことも……ブツブツ」

「あだっ！　ちょっと千冬姉！？　なんでそんなに叩いて、つつ！？　ホントに勘ぐぶっ！　やめっ！！　し　舌噛んだ！？」

この時、一夏の頭の中の全ての脳細胞はこぞって逃げ出したとか、そうでないとか…

「（ふーん、そんなに恥ずかしかったのか…）なんなら千冬ちゃんと呼んでさしあげましょぶっ！？」

「ハア、ハア……調子に乗るなよ若造、少なくともここで生徒をやっている間は名前を呼ぶことは許さん………では織斑は罰として、このクレーターを直しておけ。」

「罰って……体罰なら十分受けた…」

「何か言ったか、織斑？」

「ナンデモアリマセン。」

I S 学園ハ今日モ平和デス。

STAGE 05 ツンデレチャイナ娘、あらわる（前書き）

やっ と次話更新です…ふう。

STAGE 05 ツンデレチャイナ娘、あらわる

放課後、多くの生徒が寮に帰った頃。

この学園に二人しかいない男子生徒、霧咲藍も先日与えられた部屋へと帰ろうとしていた。

「ん、あれは……」

しかし、ふと足を止める。

視線の先には一人の女の子がいた。

「ここがIS学園ね……」

その少女と同じ様なことを少し前の自分も言っていたことを藍は思い出す。

あの時は千冬が来て、物凄い警戒されたこともついでに。

そんな風に考えていたら、徐に少女がキョロキョロとしだした。

可愛らしく考えた後……

「あれ、結局ここはIS学園のどの辺り？地図くらいよこしときなさいよ、まったく……こうなったらISで飛んで探そうかしら」

そんなことを宣った。

いきなり敷地内でISが無断飛行してたら学園側も侵入者と勘違い

してしまうのではないだろうか。

「こらこら、何を物騒なことを言っているんです。」

「え…わわわっ、もしかして学園の人？よかったー。私、転校生で総合事務受付って所に行かなきゃなんないんだけど、場所が分からなくて」

初対面ということもあり、藍は敬語を使う。

対して少女の方は良く言えばフレンドリーに、悪く言えば馴れ馴れしかった。

「そうか…なら案内しよう、どうせ暇だしね。」

「ホントッ？よかったー。」

とは言え、どう見ても年上には見えないため、すぐに藍も敬語ではなくなる。



「ねえ、あんたが『ISを動かせる世界で二番目の男』？」

「うん？まあ一応そうなるか。」

少女からの質問。

急なことで藍も質問の意図を図りかねてしまう。

「ふーん…じゃあさ一番目の男とは仲いい訳？」

「ん、一夏のことか？どうだろうな、学園内には男が他にいないから必然的によく喋ったりはするが……特別趣味が合うとかって訳

でもない、こんな環境でなけりゃ関わりなんてなかったんじゃないか？まあ、あっちはどう思ってるかは知らんが…」

藍は正直に答えた。

実際にそんな印象しかないのだろう。

「そっか…：ねえ、そいつって元気にしてる？」

「元氣、なんじゃないか？俺の知る限りでは特に変わったことはないしな…：というか、あいつと知り合いなのか？」

「えっ…：まあ、ね、うん」

「（あ、篠ノ之と同じ匂い…：こいつも一夏に惚れてるな。）おっと、あそこの建物の入口近くに総合事務受付はあるんだ。」
そこで、ようやく見えた建物を指差した藍がそう言った。

「ああ、今見えたあの建物？そっか、うん、ならもう大丈夫。案内ありがと」

「なんだったら最後まで送るけど？」

一応、藍も紳士の端くれだ。

それくらいは当然だと思っている。

「ううん、大丈夫！じゃあね！！」

「お、おう」

元氣に走り去る少女に藍は少し呆氣に取られる。

「そういえば、この時期に転校生とは珍しいな」

自分も似たようなものだったことを忘れていた藍だった

side out

凰 鈴音 side

中国から遙々IS学園にやってきた私は道に迷っていた。

そもそも敷地が広すぎる。

わかりやすく見取り図でも看板で立ててくれたらいいのに、と思わずにはいられない。

「……こうなったらISで飛んで探そうかしら」

「こらこら、何を物騒なことを言っているんです。」

やばっ、もしかして学園の関係者に聞かれてた!?

「え…わわわっ、もしかして学園の人?よかったー。私、転校生で総合事務受付って所に行かなきゃなんないんだけど、場所が分からなくて」

「そうか…なら案内しよう、どうせ暇だしね。」

よよかったー、話題転換は無理矢理だったけど案内してくれるって。

え、本気でISを使う気だったのかって?

そ そんな訳ないじゃない!!



「ねえ、あんたが『ISを動かせる世界で二番目の男』？」
「うん？ まあ一応そうなるか。」

男性用の制服を着てるのを見て、思わず質問する。
アイツの事も知ってるかな…？

「ふーん……じゃあさ一番目の男とは仲いい訳？」
「ん、一夏のことか？ どうだろうな、学園内には男が他にいないから必然的によく喋ったりはするが……特別趣味が合うとかって訳でもない、こんな環境でなけりゃ関わりなんてなかったんじゃないか？ まあ、あっちはどう思ってるかは知らんが…」

よ よく喋りはするんだ…

一番目の男、織斑一夏。
あたしの大切な幼なじみ。
それでいて一番大切な……

「そっか……ねえ、そいつって元気にしてる？」
「元氣、なんじゃないか？ 俺の知る限りでは特に変わったことはないしな……というか、あいつと知り合いなのか？」

そうだ、いきなりそんな事を聞けば誰だってそう思うに決まってる。
バ バレないようにしなきゃ……

「えっ…ま まあ、ね、うん」
「おっと、あそこの建物の入口近くに総合事務受付はあるんだ。」

って完全に吃っちゃったじゃない！？
しどろもどろしていると彼が指差した方向に建物が見えた。

チャンス!!

なんかイロイロとボロが出ない内に逃げなきゃ…!

「ああ、今見えだしたあの建物？そっか、うん、ならもう大丈夫。案内ありがとう」

「なんだったら最後まで送るけど？」

なんだ、初対面なのにそこまで気を使う必要ないのに…
っていうかアイツにもそれくらいの器量があれば……

「ううん、大丈夫！じゃあね!!」 「お、おう」

だ 大丈夫よね？

バレてない…わよね??



スパアアンツ

言われた建物まで走っていると竹刀の音が聞こえた。

近くで剣道でもやってるのかしら？

でも近くに柔剣道場みたいなのはない。

んー外でやってるのかしら…

「…受付の場所は分かったし、ちょっと見に行くくらい大丈夫よね。」

ちょっと気になって、進路を変更する、
でもその判断に少しだけ後悔するだなんて、その時は思いもしなかった。

「まだだ、まだ動きが鈍いぞ一夏!!」

「ちょっと待ってくれて箒。マ マジで休憩させてくれよ……」

あれって…一夏？

うわぁ、久々に見ただけが変わってない!!

ううん、よく見ればちゃんと背は伸びてるし、全体的にちょっと男らしくなったかも。うん、ちょっと前にニュースで見た顔写真よりずっといいや。

でもあの女子はなんなんだろう…

ちょっと…いや随分と馴れ馴れし過ぎやしないかしら？

仕方ない、ここで出ていってちょっと脅かしてやろっと。

「おーい、いち…」

「まったく…しっかりしてもらわねば困る、お前はクラス代表なのだからな。代表戦までには強くなってもらわねば…ほら手を貸すから早く立て。」

「分かってるって…ありがとな、よいしょ………ってうおっ!？」

相手の子の力が強かったのか、一夏の足腰が相当疲労したか、はたまたどちらもか……

ううん、そんな事はどうでもいい。

今、私が気にするべきところはそこじゃない。

あの馬鹿、よりもよって胸に顔からダイブしやがったのよ!!
そんなに巨乳がいいかぁ!!

クロス……

でも、ここで出ていくのはやめにするわ。
アイツも相手の子に殴られてるし。

それにいいことを聞いた。

クラス代表戦か…待ってなさいよ一夏。

こうなったら、その代表戦でこてんぱんにしてやるんだから！

約束共々、覚えてなさいよ！！

STAGE 6 セカンド幼なじみ

side 藍

「おはようす」

「よっ、聞いたか、藍。なんでも転校生が来るらしいぜ」

教室に着いて、席に座ろうとした俺に一夏がそう話しかける。

「ふーん」

「こんな時期に珍しいけど、何でも中国の代表候補生らしいぜ」

転校生、転校生……昨日の子か。

「ふーん」

「おそらく、わたくしの存在を危ぶんでの転入でしょう。」

いつの間にか隣に来ていたセシリア自信たっぷりの笑みでそう言う。
いやいや、ないだろ。なんて思っても言っちゃいけないぞ、諸君
よ。

「別にこのクラスに入るわけではないだろう？騒ぐほどの事ではあるまい」

すると、いつの間にか篠ノ乃も一夏の隣に立っていた。

「でもさ、どんな奴なんだろうな」

「む……気になるのか」

「ん、まあな」

「ふん・・・」

わーい、篠ノ之さんが不機嫌だ！。

一夏の返答に篠ノ乃的は気に入らなかつたらしく、眉間に皺を寄せて鼻を鳴らす。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「わ 分かってるって…そういうさ、その転校生って専用機持つてるのかな？」

あ、無理矢理に話題を変えたな。

「どうでしょう、中国のISと言えば既に第三世代ISの開発に着手しており、燃費と安定性を第一に設計されてるらしいですが…」

「へー、それってすごいのか？」

「ええ、従来のISは燃費が悪いので、安定性に欠けますのよ。しかしまあ現在一年で専用機を持っているクラス代表は一組と四組だけという話ですから、おそらく強敵となり得ることは…」その情報、古いよ！」む、誰ですの、人がせつかく…」

説明を続けようとするセシリアの声に割り込むように、突然教室の入り口から声が聞こえてきた。

クラス全員が一斉にそちらを向くと髪をツインテールにした小柄の少女がドアにもたれかかっていた。

やはり、先日案内した少女で間違いはなかったらしい。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝させると思ったら：「鈴：？鈴なのか！？」あんたねえ：そうよ、中国代表候補生、鳳鈴音。ファン・リンイン今日は宣戦布告に来たってわけね」

名乗りをあげた鳳はフツと軽く笑いながら、自分の手でツインテールを揺らしてみせる。

「なに格好つけてんだ、すげえ似合わないぞ」

「んなっ！なんて事言うのよ、あんたは！！」

なるほど、クールに決めようとしたのか。
残念ながら一夏のせいで地がバレバレだが。

「おい」

「なによ！！」

バシンッ！

いつの間にか背後に立っていた織斑教諭に対して、声の主を確認しなかった鳳の頭には強烈な出席簿が炸裂した。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん…」

「織斑先生だ、さっさと自分の教室に戻れ、そして入り口を塞ぐな、邪魔だ。」

「は、はいっ!!」

織斑教諭に怯えながら、ドアから退いた鳳はまた一夏の方を向き、

「また来るからんだから、逃げないでよね、一夏!!」

「さっさと戻らんか」

「ひっ、はい!!」

教諭によりちらつかされた出席簿に反応した鳳は教室へと逃げるように戻っていった。



昼、チャイムが鳴り、俺は一夏、箒、セシリアと一緒に食堂に向かっていた。

「それにしても鈴が代表候補だったとは……」

「っていうか、あの子とお前の関係を教えろ。」

一夏の横にいた篠ノ之とセシリア、そして後ろからぞろぞろと着いて来ていたクラスメイト達が一斉に反応し、一夏を見る。

「ああ、幼なじみなんだよ。箒とは入れ違いになってたから知らないだろうけど、小学校の時から付き合いです。まあ箒をファースト幼なじみだとすると、鈴はセカンド幼なじみってとこかな」

「幼なじみにファーストとかセカンドってあったのか」

っていうか篠ノ之も可愛そうに、特別な存在じゃないにしても、自分も同列扱いなのに気づいたらしい。

わーい、篠ノ之の機嫌がわるーい

そうして食堂に着いた一団を……

「待っていたわよ、一夏!」

お盆を両手で持った鳳が待ち構えていた。

：いや、それにしても邪魔だな

何せ鈴が立っていたのは券売機の前だ。

そんな所に立たれたら、食券が買えない。

「鈴、そこに立っていたらみんなの邪魔になるって」

「うっ、分かってるわよ」

彼女の昼食はラーメンのようだが……

「麺伸びるぞ」

「う　五月蠅いわね、アンタを待っていたんでしょうが!　何でも
っと早く来ないのよ!」

なんて無茶な。

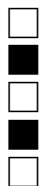
ちなみに今日の俺の昼飯は、肉うどんにおにぎりとサラダだ。

え、弁当?

作ったら周りの女子連中が騒ぎ立てるのは必至でしょうよ。

「とりあえず話は後にして、場所取りしようぜ。」

食券を食堂のおばちゃんに渡し、ふと見ると鳳は先に席を取りに行
ったようだ。



「じゃあ、自己紹介から始めようか。俺の名前は霧咲藍。」

「ん、昨日案内してくれたのはアンタよね、ありがと。」

どうやら覚えていたらしい、いや、まあ忘れられててもショックだけど…

「それで、俺の隣にいるのが…」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットとは私のことですわ
！！」

「ああ、そうなんだ。でもあたし他国の代表候補とは興味ないから。」

言い方キツいな！？

隣でセシリアが声をあげてるし…

「え ええと、それで一夏の隣にいるのが…」

「……………篠ノ之箒だ。」

「……………よろしく。」

うわあ、二人の間に火花が…

篠ノ之は一夏に馴れ馴れしい鳳に敵意をもって、鳳も鳳でそれに気付いてお互いに睨み合っている。

しかし原因である馬鹿（一夏）は…

「……………？」

これだからなあ……

まったく二人共苦勞する、可哀相に……

「そ　　そういや一夏ってクラス代表なのよね？…なんだったら、あたしがISの操縦を教えてやってもいいわよ」

「え、ホントか？いやあ助か……」

「結構だ、一夏が私に直接頼んできたので間に合っている。」

待て篠ノ之、なんでお前が答える。

「いや、俺は別に……」

「そもそもお前は二組だろう、敵を強くしてどうする!!」

「うっ、アンタには関係ないでしょうが！それに一夏のIS搭乗時間の総数はいくらよ!!」

「えーと、じ　10時間くらい………かな」

おそらくもっと少ない。

聞いた話だと、篠ノ之との特訓では剣道しかしてないとか。

授業でも乗るが、何時間も連続して乗る訳ではない。

一夏にとってはそれが多いかと思っていたのか、見栄をはったのか……多分両方だな。

「ぜんっぜん足りない、よくそれで専用機持ちやってるわね。そんなんじゃああたしに手も足も出ないわよ。」

まったくもってその通り、しかし言葉が足りなかったな。

「（カチーン）なっ、そんなもんやってみなきゃ分からないだろ！」

「（カチーン）分かるわよ！！」
今のやりとり

鳳に今のままでは手も足も出ないと言われた一夏は、どうせ自分では勝てないと言われた様に感じ

一夏にやってみなければ分からないと言われた鳳は、その程度の実力だと思われていると感じたらしい。

あっという間にケンカの出来上がり。

「そこまで言うならやってやるわよ！完膚なきまでに潰してやるんだからね！！」

「上等！後悔するなよな！！」

あーあ、周りも何事かと覗き込んでくる。

「は ら た つ！ごちそうさま！！ふんっ」

いつの間にかラーメンを食べ終えた鳳は鼻をならして帰って行った。

「まったく、鈴のやろう、好き勝手言いやがって…」

「しかし八割方は鳳の言う通りなんだから、頑張れよ」

俺も食い終わり、盆を片付けようとした俺を一夏がキョトンとして俺を見る。

「えっ、ちょっと待ってくれよ藍！助けてくれないのかよ！！」

……やっぱりか。

「お お待ちなさいな！藍さんとの訓練は私の方が先約でしてよ！」

「おっ、なら一緒に訓練したらいいじゃないか」

こいつ…

「あの一夏、少しくらいは自分でどうにかするという考えはないのか、そもそも手伝ってもらえるだろうと予防線を張ってることが腹立つ。それにお前、訓練用ISの借り方知ってんのかよ」

「い いや、知らないけど…」

「つまり実践形式の訓練で経験を積もうとは考えもなかった訳だ。」

「考えはしたさ！ただ箒がまずは体を鍛えろって言うから…」

「一夏っ!？」

はぁ………話にならん

「とにかく、俺はそうやって自分の手札を確認もせずになんかやる、と思ってる辺りが気に喰わん……というか、そういうスタンスは嫌いだ。」

今度こそ盆を返却棚に返して、食堂を出る。

「あ ああの……少し言い過ぎだったのでは？」

後ろからはパタパタと着いて来たセシリアが俺に問い掛ける。

「そうかもしれんが、これはアイツのためでもある。」
「え……」

その後の授業、一夏と篠ノ之からの視線が居心地悪かった。

放課後、俺はセシリアと一緒に訓練をすべく廊下を歩いていた。

「霧咲ッ!!」
「ん？」

すると後ろから篠ノ之が追いかけてきた。

「なんだ、篠ノ之？」
「あの、その……頼む、一夏を鍛えてやってはくれないか？」

正直意外だった、てっきり一夏との訓練の（二人きりの）時間を取られたくない、と言うと思っていたからだ。

「あ アイツが言ってたように、私が実機訓練をさせなかったのは事実なんだ……だからっ」

「あのなあ篠ノ之、別に俺はお前を責めたつもりはないぞ。それに

頼むのなら何故一夏がない。」

一夏は落ち込んでいるのか、ふて腐れているのか……
篠ノ之は健気だねえ…

「うっ……それは…」

「だがまあ、篠ノ之の気持ちは汲むべきか……俺達は第一アリーナにいる、来たければ好きにしろ。」

「あっ、ああ!!」



side 織斑一夏

「まったく…藍のヤロー、あそこまで言わなくても」

「一夏っ!!」

そう言っていると、不意に後ろから誰かから声をかけられた。
不満を言ってる引け目からも肩を揺らして驚いちゃったけど……バ
レてないよな？

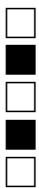
「なんだ、箒じゃんか。どうかしたか？」

「少し着いて来い」

うおっ、急に手を引っ張るなよ!!

「待って箒、どこに行くんだよ!？」

「いいから黙って着いて来い!」



箒に手を引かれてやってきたのはアリーナだった。

「なあ箒、一体ここで何が」

「あれを見ろ、一夏」

そう言って、箒が指差した方向を見る。

そこには模擬戦をしている藍とセシリアの姿があった。

その姿はとにかく凄かった。

セシリアはライフルやビットを駆使し、攻撃を放つ。

それを藍はとにかく避ける。

背後からの攻撃も、無理な体勢へと放たれた一撃も。

死角からの攻撃もISのハイパーセンサーで分かるとは言え、もしもあそこに自分がいたとして同じ動きが出来る自信はない。

この時、俺は一つの感情に支配されていた。

劣等感？

嫉妬？

：確かにそれもあるかもしれない、でもそうじゃない。

自分もあの高みへと上り詰めたいという気持ち。
それと藍に対するライバル心。

その二つがぐるぐると混ぜ合わさったものが憧れになって俺の中で
暴れ回っていた。

「なあ箒。」

「なんだ？」

「俺もあんな風に飛べるかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4274r/>

IS インフィニット・ストラトス--魔神に仕えた彼の生き様は--

2011年11月29日14時48分発行